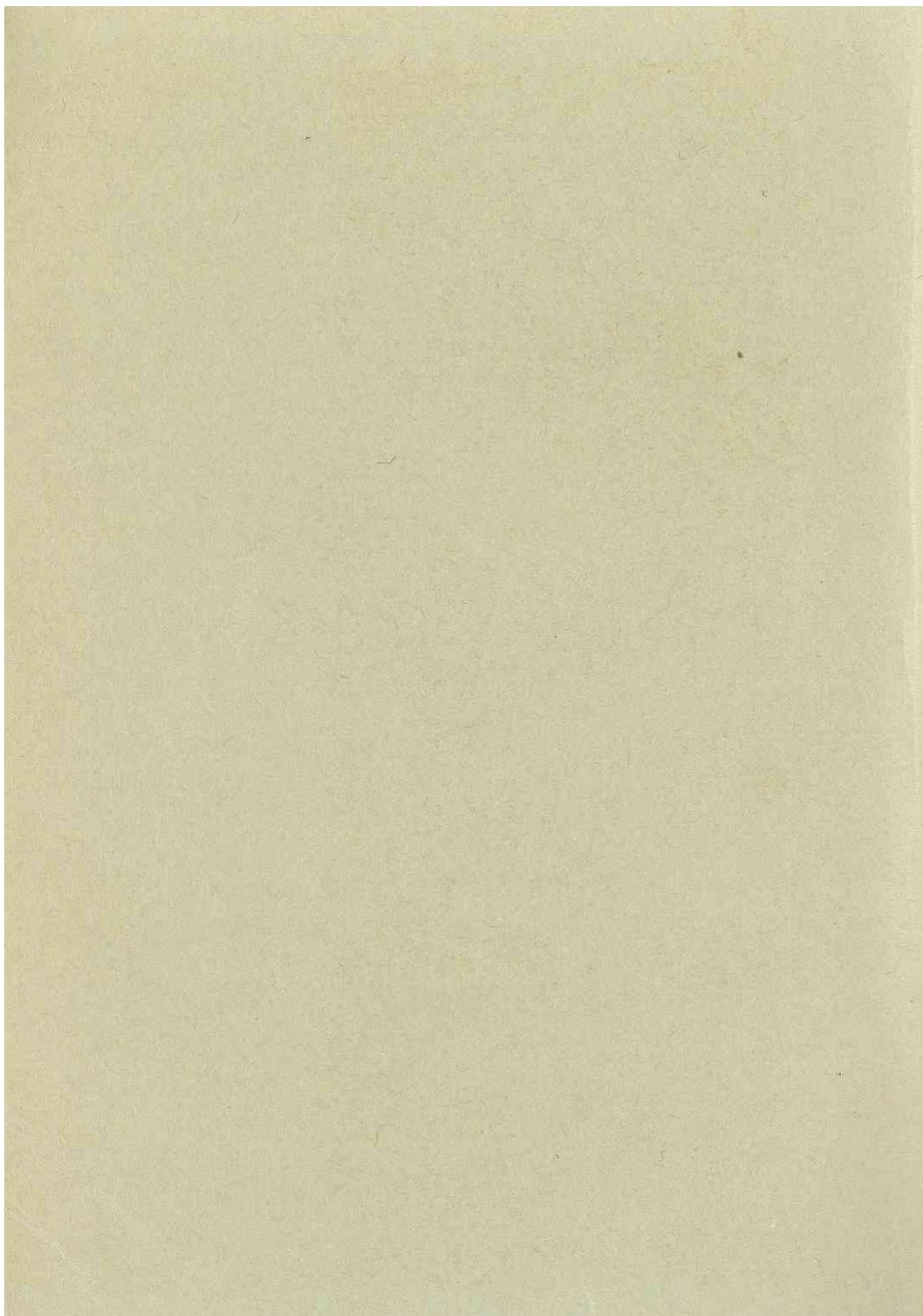


蒼山志

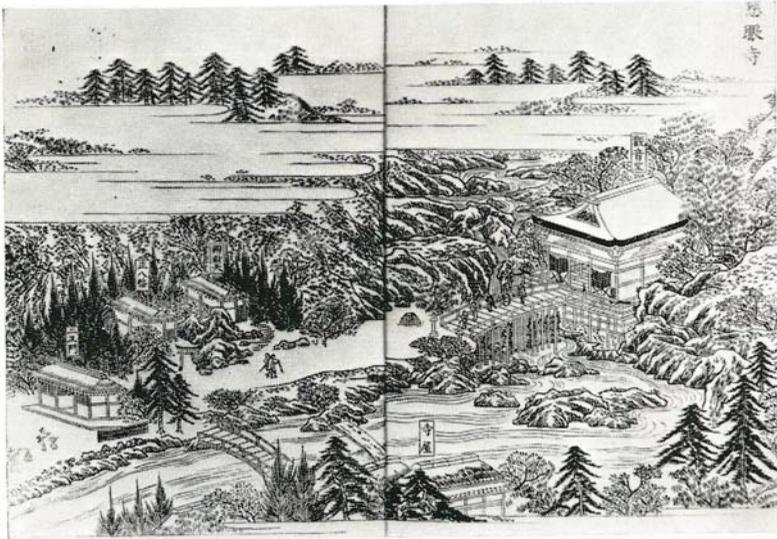


蒼山志

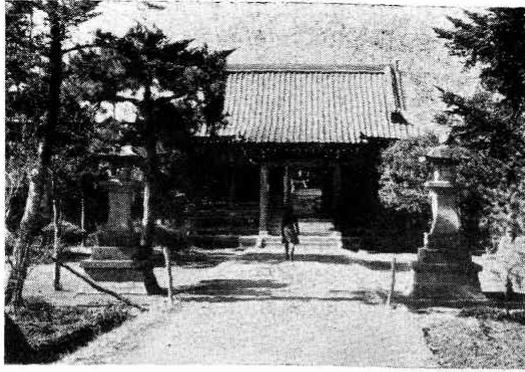




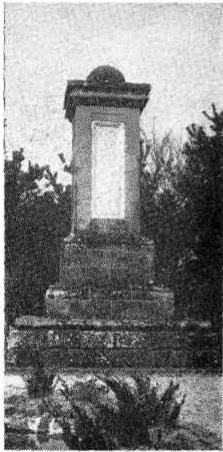
谷山市街地と臨海工業地帯の造成



慈眼寺（三国名勝図絵）



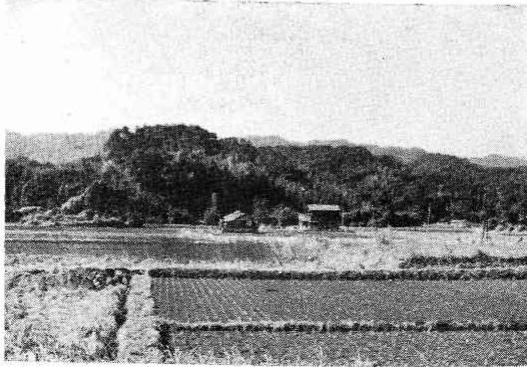
谷山神社



御所ヶ原



懷良親王



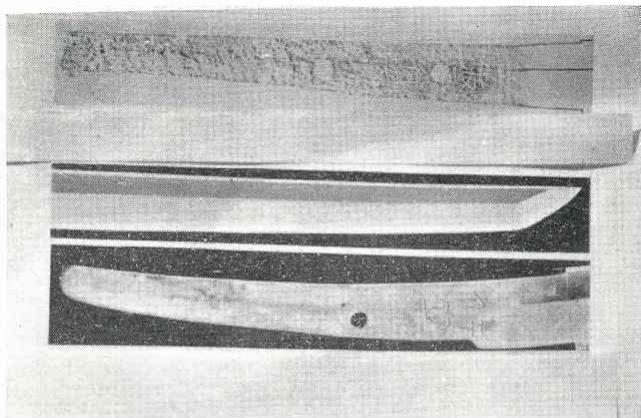
城本



伊佐智佐神社御神幸（旧松崎通）



古 文 書



波平行安（二代）の名刀  
愛知県猿投神社所蔵（国宝）



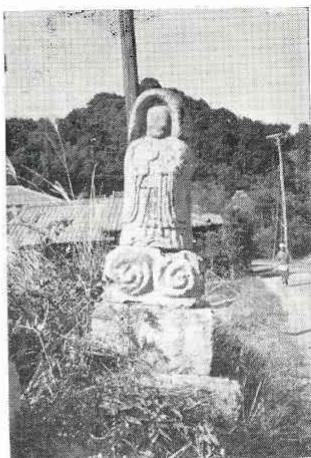
錫 器

長太郎焼

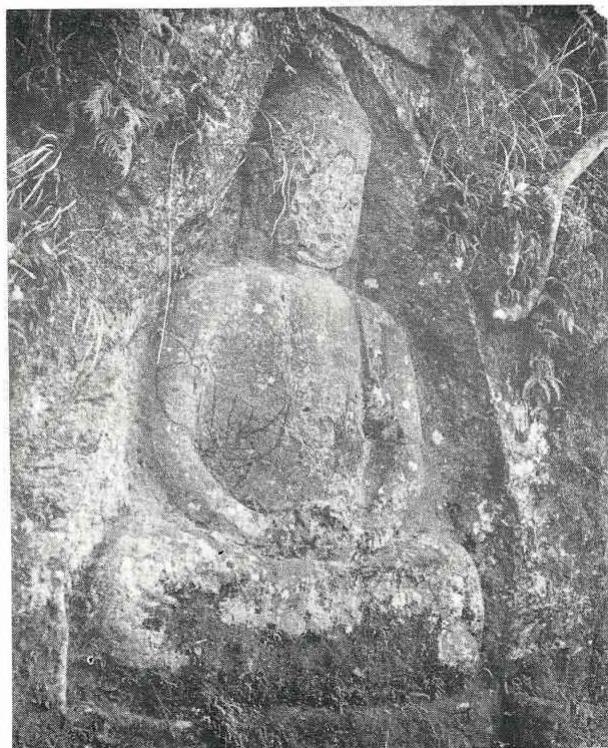




県文化財指定 虚無僧踊（中町）



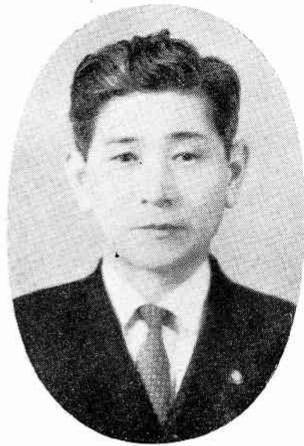
県文化財指定 田の神（一丁目）



清泉寺 阿弥陀仏



議会議長 福島善之助

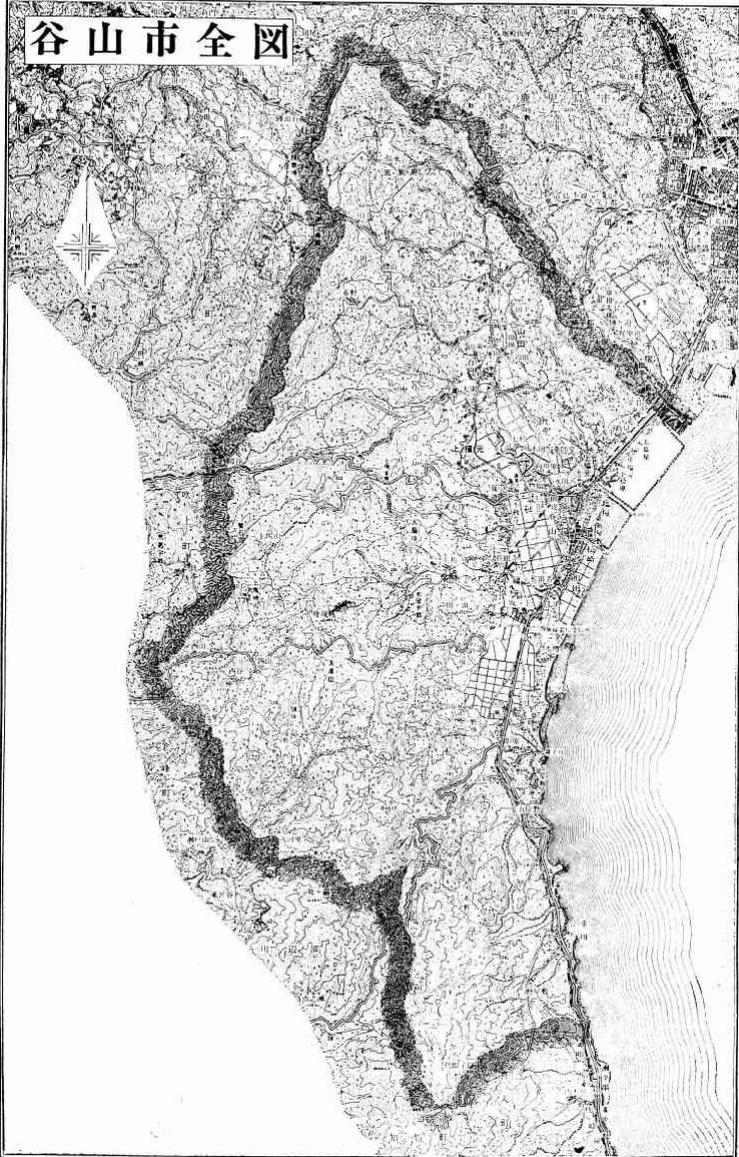


谷山市長 川元 浩



谷 山 市 役 所

谷山市全図



# 谷山市古跡区



## 序 文

昭和三十八年初頭谷山市としての郷土誌を作りたい。作るべきである、という話を持ち上った。ちようどその頃は前年桑鶴実前市長急逝の跡を承けて、不肖私が市長に就任（昭和三十七年八月）した直後であり、また谷山市としては市制施行（昭和三十三年十月）後いくばくも経ていない時であり、さらにまた長い間の問題であつた鹿児島市との合併問題を一時白紙にかえて（昭和三十七年六月）谷山市独自の発展を期して起き上つていた時期でもあつた。

それから四年間にわたる今日まで、編纂に当られた各位の文字通り寢食を忘るる意気込みの努力が続けられ、茲に発刊の運びに至つたことはまことに感慨深いものがあり、関係の各位の労を深く感謝する次第である。

この四年の間にも、谷山市にとっては大きな変貌があり、また発展もあつた。特に、この四月二十九日には二十年來の課題であつた鹿児島市との合併が実現して、新しい歴史の日を迎えようとしている。そして、この郷土誌は奇しくもこの歴史的な瞬間を記念する使命をも果たすことになつたのである。

吾々が郷土の発展と繁栄を望み、将来への希望と期待をみつめながら、現在の努力を意欲あらしめる為には、吾々の先人が遺された過去の事実を正しく認めることがその前提になるのである。それによつて貴重な教訓と反省が生れ、そして郷土に対する愛情も一層深まるものと考えられる。

本書は、谷山の郷土誌としては最も大規模に編まれた最初のものであり、もとより完全無欠とは言い得ないが、少くも現在に於ては為し得る最大の努力が払われたものである。今後さらに加筆修正を必要とすることも予想されるが、

願くば現在および次の世代に於ても、ひきつづいて努力が続けられ、また内外の協力と叱正を懇願してやまない次第である。

昭和四十二年三月

谷山市長 川 元 浩

# 谷山市誌 目次

序 文 谷山市長 川元 浩

## 写真地図

第一編 谷山の概観……………一

第一章 谷山の沿革……………一

第二章 谷山の自然……………二

第一節 位置……………二

第二節 地質……………三

第三節 気候……………三

第二編 谷山の歴史……………六

第一章 先史時代……………六

第一節 先史時代のあらし……………六

第二節 谷山の先史時代……………七

一 谷山の地形……………七

二 谷山の先史時代の研究……………八

三 谷山に於ける遺物遺跡の分布状況……………九

1 縄文文化……………三

2 弥生文化……………六

(イ) 北部地域……………六

(ロ) 中央部地域……………四

(ハ) 坂之上・影原地域……………四

(ニ) 平川地域……………四

(ホ) 錫山、火の河原地域……………四

3 古墳文化……………四

第三節 谷山の主な遺跡……………四

一 塔ノ原遺跡……………四

二 三重野遺跡……………五

三 上ノ原遺跡……………五

四 中町辺田遺跡……………五

五 草野貝塚……………五

六 平川黒岩遺跡……………六

七 須々原開拓地遺跡……………六

八 笹貫遺跡……………七

九 薬師堂遺跡……………七

十 不動寺部落の遺跡……………七

十一 北麓遺跡……………七

十二 慈眼寺包含地……………七

十三 和田玉林遺跡……………七

十四 坂ノ上東前遺跡……………八

十五 清泉寺跡洞穴遺跡……………八

第四節 谷山に於ける遺物出土地並に遺跡地名表……………八

第二章 古代社会……………八

第一節	古代社会のあらまし	九
第二節	古代の薩摩	一〇
第三節	谷山郡の設置	一三
第四節	社寺と社寺領	一六
第五節	国政の衰退と荘園の発達	二〇
<b>第三章 中世</b>		
第一節	中世のあらまし	二二
第二節	薩摩の豪族と島津の入薩	二五
第三節	谷山の支配	二九
一	阿多氏と島津氏	二九
二	谷山氏と別府氏	三三
三	山田氏	三三
第四節	谷山郡をめぐる論争	三七
	谷山氏と山田氏の争い	三七
一	論争の内容と経過	三七
二	谷山氏と山田氏の論争についての研究	三八
第五節	谷山の荘園	三九
第六節	蒙古の襲来と谷山	四〇
第七節	南北朝時代の谷山	四一
一	建武の新政	四一
二	南北朝の乱	四二

三	山田氏と谷山氏の活動	四二
四	懐良親王の薩摩着御と谷山	四三
五	懐良親王の肥後入御	四六
附記	城壘一覧	四九
<b>第四章 近世</b>		
第一節	農民の生活	五〇
一	藩政時代の社会制度	五〇
1	郷の行政組織	五〇
2	門の義務	五〇
3	村における門の数	五〇
二	勸農仰出書	五二
三	水俣門名主長兵衛の日帳	五七
四	農民と櫓	五九
五	藩政時代の人移	五九
第二節	武士の生活	五九
一	中村辺田の武士団	五九
二	斉彬公上覧砲術	六〇
三	清見寺の煙硝倉	六一
四	関狩と山神祭、御場	六一
五	新刀時代の波ノ平刀工	六二
六	谷山郷士の武術鍛錬	六二

七	谷山郷士平山貞右衛門の家訓	三二
八	郷士の農業経営	三三
九	豊臣秀頼の薩摩落	三六
一〇	赤松氏と舟石	三三
第三節	事変と谷山	三四
一	薩英戦争と谷山	三四
二	戊辰戦争と谷山	三六
三	西南戦争と谷山	三六
四	丁丑役出旅日要記	三五
<b>第三編</b>	<b>行政史</b>	
<b>第一章</b>	<b>緒言</b>	三五
<b>第二章</b>	<b>前史</b>	三六
<b>第三章</b>	<b>後史</b>	三九
第一節	概説	三九
第二節	歴代の首長、助役、収入役	三九
第三節	歴代の議長、副議長と議員	四一
第四節	役場の庁舎	四六
第五節	役場機構の消長	四六
第六節	財政の規模	四五
第七節	人口の推移	四七
<b>第四章</b>	<b>市営の諸施設</b>	四二

第一節	水道施設	四二
第二節	市営住宅	四三
第三節	青果市場	四五
第四節	福祉会館	四六
第五節	保育園	四七
第六節	隔離病舎と塵芥焼却炉	四八
第七節	火葬場と公園墓地	四九
第八節	慈眼寺公園と護国神社	四〇
第九節	共楽園と愛の聖母園	四三
<b>第五章</b>	<b>鹿兒島市との合併</b>	四五
<b>第六章</b>	<b>官公署の沿革史</b>	
第一節	谷山郵便局	四四
第二節	谷山警察署	四七
第三節	谷山消防署	四〇
第四節	鹿兒島地方事務局谷山出張所	四四
第五節	農林省家畜衛生試験場九州支場	四五
第六節	専売局鹿兒島たばこ試験場	四七
第七節	鹿兒島県農業試験場	四〇
第八節	鹿兒島県中央児童相談所	四一
第九節	慈眼寺寿光園	四三
第十節	錦江赤十字病院	四四

第十一節	軍馬育成所と谷山受信所	四〇
第十二節	玉里別荘と去來荘	四〇

#### 第四編 産業経済史

##### 第一章 農業史

第一節	明治以降の農業	四一
第二節	飢饉	四一
第三節	和田干拓と耕地整理	四六
第四節	産業組合から農業協同組合へ	四六
第五節	森林組合と酪農組合	四七
第六節	農地改革と農業委員会	四七
第七節	最近の概況	四七

##### 第二章 林業史

第一節	森林と山神	四八
第二節	藩政時代の森林	四八
第三節	明治維新以後の森林	四九
一	維新と森林政策	四九
二	保安林	四九
三	保護林	四九
第四節	谷山に於ける官有地と民有地	四九
一	各町村の官地	四九
二	各町村別民有林	四九

##### 第五節 市有林

一	谷山市の林野面積	五〇
二	谷山市有林野収支計算	五〇
三	保安林と共有林	五一
四	共有林野	五一
五	林道と営林地	五二
六	学校林	五三
第六節	森林組合	五三
第七節	その他特記事項	五七
第八節	営林署	五九
一	鹿児島営林署歴代署長	五九
二	鹿児島営林署谷山担当区	五〇
三	鹿児島営林署鹿児島苗木事業所	五一
四	官庁の変遷	五三

##### 第三章 鉱業史

第一節	錫山地域概況	五四
第二節	錫山鉱山地質概説	五五
第三節	沿革の大要	五三
一	発見から第二次終戦	五三
二	西南興業株式会社錫山鉱山	五三
三	西錫山鉱山	五三

四	放射能異常調査……………	五〇
五	錫山鉦山探鉦試錐……………	五〇
第四節	産額一覽表……………	五〇
第五節	主なる施設……………	五六
一	谷山錫山物定帳……………	五六
二	その他……………	五八
三	錫山鉦山製錬……………	五九
第六節	錫山鉦山文献……………	五九
第七節	亜砒鉦山……………	五九
第八節	谷山に於ける鉄山……………	五九
<b>第四章</b>	<b>水産業史……………</b>	五九
第一節	水産業の今昔……………	五九
第二節	納屋と漁業協同組合……………	五九
第三節	谷山漁協と鹿兒島中央市場との關係……………	六〇
第四節	人移しと海難史……………	六三
第五節	最近の概況……………	六五
<b>第五章</b>	<b>商業史……………</b>	六五
第一節	商業の今昔……………	六五
第二節	金融機關の進出……………	六六
第三節	谷山商工会の誕生……………	六六
第四節	国道の拡張と整備……………	六九

第五節	最近の概況……………	五九
<b>第六章</b>	<b>工業史……………</b>	五九
第一節	工業の今昔……………	五九
第二節	最近の概況……………	六〇
第三節	臨海工業地帯の造成……………	六三
<b>第五編</b>	<b>交通史……………</b>	六九
<b>第一章</b>	<b>道路と車馬……………</b>	六九
<b>第二章</b>	<b>軌道とバス……………</b>	六九
<b>第六編</b>	<b>教育文化……………</b>	六九
<b>第一章</b>	<b>明治維新以前の教育……………</b>	六九
第一節	藩校造士館と谷山郷士……………	六九
第二節	麓と郷中教育……………	七〇
第三節	稽古所……………	七〇
一	稽古所の起源……………	七〇
二	稽古所の實際……………	七〇
1	地頭仮屋稽古所……………	七〇
2	川口稽古所……………	七〇
3	辺田郷中稽古所……………	七〇
4	錫山山中稽古所……………	七一
第四節	庶民教育……………	七二
一	家庭を中心とした教育……………	七二

二	子供組を中心とした教育	四〇
三	青年期の教育	四〇
四	女子の教育	四〇
五	寺子屋	四〇
六	塾(松崎塾)	四〇
七	職人教育	四〇
<b>第二章</b>	<b>教育の発達</b>	四一
一節	学制発布までの教育	四一
一	立志館の設立	四一
二	外城第十五郷校の設立	四一
三	辺田学館	四一
二節	学制発布後の教育	四二
一	教員の養成	四二
二	川口小学の設立	四二
三	辺田学校	四二
四	谷山小学校の設立	四二
五	村校の設立	四二
三節	学舎の創立	四三
一	清溪学舎	四三
二	辺城学舎	四三
三	松青学舎	四三

四	啓蒙学舎	四七
四節	勤労青年の教育	四八
一	実業補習学校	四八
二	青年訓練所	四八
三	谷山町立実践女学校	四八
四	谷山町立青年学校	四八
第五節	戦時下および戦後の教育	四九
一	戦時中の教育	四九
二	戦後の教育	四九
1	六三制教育	四九
2	教育委員会	四九
3	六三制学校建築	四九
4	谷山高等学校	四九
イ	谷山高等学校の設立	四九
ロ	谷山高校建築と県立移管	五〇
5	ラ・サール高校	五三
6	鹿児島電子工業高等学校	五〇
7	鹿児島経済大学	五〇
8	鹿児島工業短期大学	五〇
9	幼稚園教育	五〇
イ	谷山幼稚園	五〇

ロ	清谿幼稚園	頁
ハ	ひまわり幼稚園	頁
二	谷山善き牧者幼稚園	頁
<b>第三章</b>	<b>社会教育</b>	頁
第一節	青年団	頁
第二節	婦人会	頁
第三節	公民館	頁
第四節	体育協会	頁
第五節	産業と教育	頁
<b>第四章</b>	<b>学校沿革史</b>	頁
<b>第七編</b>	<b>宗教</b>	頁
<b>第一章</b>	<b>神社</b>	頁
一	谷山神社	頁
二	伊佐智佐神社	頁
三	鎮守神社	頁
四	黒丸神社	頁
五	白山比咩神社	頁
六	南方神社	頁
七	柏原神社	頁
八	稻荷神社	頁
九	谷山護国神社	頁

十	大山祇神社	頁
十一	大山積神社	頁
十二	烏帽子嶽神社	頁
十三	塩竈神社	頁
十四	立神社	頁
十五	諏訪大明神その他	頁
<b>第二章</b>	<b>仏寺</b>	頁
一	慈眼寺	頁
二	皇徳寺	頁
三	清泉寺	頁
1	清泉寺跡の位置及地形	頁
2	清泉寺の遺蹟	頁
3	清泉寺跡調査	頁
四	報国山隆国寺跡	頁
五	真宗本願寺派深機山妙行寺	頁
六	浄土真宗本願寺派明楽寺	頁
七	真宗大谷派松雲寺	頁
八	東本願寺大谷派願生寺	頁
九	真宗興正寺派松林山浄圓寺	頁
十	浄土宗菩提山来迎寺	頁

十一	葉師堂	四五
<b>第三章</b>	<b>一向宗の信者</b>	
一	薩摩の一向宗禁制	四四
二	一向宗信者の法難	四五
三	かくれ念仏の洞窟	四五
四	細布講の由来	四五
五	是枝千亀女史と細布講	四六
六	坂之上の諸講様	四六
七	和田塩屋の明順講	四六
<b>第四章</b>	<b>キリスト教</b>	
一	谷山に於けるカトリックの教会沿革	四七
二	日本バプテスト連盟谷山キリスト教会	四七
三	キリシタン信仰と谷山	四七
<b>第八編</b>	<b>民俗</b>	
第一節	年中行事	四八
第二節	衣食住	四八
一	衣生活	四八
二	食生活	四九
三	住生活	四九
第三節	一生の儀礼	四九
第四節	社会生活	五〇

第五節	祭祀	五〇
第六節	芸能と民謡	五〇
第七節	遊戯	五一
第八節	伝説と民話	五一
第九節	神祠一覽表	五一
<b>第九編</b>	<b>名勝 旧跡 観光</b>	
一	慈眼寺公園	五二
二	清泉寺跡	五二
三	和田浜、久津輪崎、七つ島	五三
四	征西將軍懷良親王記念碑	五三
五	菊池城址	五三
六	谷山城址	五四
七	陣之尾城址	五四
八	見寄の遺跡	五四
九	皇立寺跡	五四
十	神前城址	五四
(付)	1 ススメ塚 2 宇宿城址	
3	伊佐智佐神社の旧鎮座の地	五五
十一	波平城址	五五
十二	椿山城址	五五
十三	苦辛城址	五五

十四	川口城址	二四〇
十五	皇徳寺跡	二四〇
十六	岩下の浜	二四〇
十七	烏帽子嶽	二四〇
十八	波平刀匠の遺跡	二四〇
1	波之平刀匠之碑	二四〇
2	寿庵松の碑	二四〇
十九	三条小鍛治宗近碑	二四〇
二十	小伝次の墓	二四五
二十一	伝説 豊臣秀頼の墓	二四五
二十二	地頭仮屋	二四五
二十三	錫山手形所跡	二四五
二十四	岩屋御仮屋跡	二四五
二十五	権現ヶ尾岳と錫山相撲	二五〇
二十六	鬢石	二五〇
二十七	光山の由来	二五〇
二十八	山田一丁田の田の神	二五〇
二十九	谷山名物	二五〇
<b>第十編 人物史</b>		
<b>第一章 歴史上の著名な人々</b>		
	谷山五郎隆信	二六〇

赤崎海門	二六〇
是枝柳右衛門	二六〇
松方正義	二六〇
<b>第二章 先覚者と有名人</b>	
川畑半平清真	二六〇
平田宗質	二六〇
波平行安	二六〇
八木主水佑元信	二六〇
有山長太郎	二六〇
<b>第三章 官界、政界で活躍した人々</b>	
菅井誠美	二六〇
川幡清貞	二六〇
新保利貞	二六〇
入佐清静	二六〇
厚地政敏	二六〇
<b>第四章 地方自治功労者</b>	
伊地知季治	二六〇
長野武熊	二六〇
福留彦七	二六〇
桑鶴 実	二六〇
(付) 谷山出身の歴代県会議員	二六〇

**第五章 財界、実業界で活躍した人々**

吉井友兄……………二九  
山下秀実……………三〇  
塚田喜太郎……………三〇  
山下佐太郎……………三〇  
是枝定助……………三〇  
上村政吉……………三〇

**第六章 地方産業功労者**

川畑亭介……………三〇  
海老原為治……………三〇  
八色彦次郎……………三〇  
有馬壯吉……………三〇  
内村直次郎……………三〇  
瀬戸口長右衛門……………三〇  
岩崎栄一……………三〇  
芝野森之助……………三〇

**第七章 武家郷土と軍人**

川上四郎兵衛忠兄……………三〇  
名越高朗……………三〇  
松田為徳……………三〇  
大脇為政……………三〇  
長野祐通……………三〇

**第八章 学者・教育者・医師**

黒木 実……………三三  
入佐俊家……………三三  
黒木政吉……………三五  
伊地知四郎……………三六  
（付）谷山出身の主な陸海軍人……………三八  
海老原丹堂……………三九  
松田為常……………三九  
玉利喜造……………三九  
平井政治……………三九  
木原定作……………三九  
伊牟田八三次……………三九  
樋渡一夫の兄弟……………三九  
（付）谷山出身または谷山の医学博士……………三九

**第九章 篤行、節婦 その他**

井原十兵衛……………三九  
是枝千亀……………三九  
前野カヤ……………三九  
八色総右衛門……………三九  
西 謙蔵……………三九  
小倉常吉……………三九  
ベン・クロキ……………三九  
谷山市郷土史年表……………三九  
編集後記……………三九